

## はじめに

弘法大師空海の『般若心経秘鍵』の撰述の動機を記した大綱序は、「夫れ佛法は遙に非ず。心中にして即ち近し。眞如外に非ず。身を棄てて何んか求めん。」で始まる。これは、真言密教の「即身成仏」思想の真髓を的確に表現した文といえる。

続く大意序において、「五藏の般若は一句に賺んで飽かず、七宗の行果は一行に歡んで足らず。」と記し、『般若心経』には、仏教のすべての教えが含まれていると説く。

『般若心経秘鍵』は、このような書き出しで始まり、『般若心経』の註釈という形をとりながらも、空海自らが確立した真言密教の集大成とした意味合いを強く感じるのである。

本稿では、『般若心経秘鍵』に記された空海の『般若心経』観について考察する。

## 『般若心経』とは

『般若心経』は羅什訳『摩訶般若波羅密多経』の肝要を略出した教典とされる。『摩訶般若波羅密多経』は、膨大な『般若経』群の中の教典であり、紀元前後に成立したと考えられている。

『般若心経』はもともと『般若波羅密多の呪』という呪文に、玄奘（602-664）が「経」を付加して翻訳した。このことで、大乘仏教の「空」の思想を説いた権威ある教典として位置づけられるようになったと考えられている。しかし、民衆の中にあっては、呪文、写経の対象、読誦と最もポピュラーな「お経」として広まっていったのである。

玄奘の時代からは100年以上の時は流れるが、空海が『般若心経』に密教的一面があると理解していたとすることは、そう無理のない推察といえよう。

## 弘法大師空海の解釈

『般若心経秘鍵』には、空海の『般若心経』に対する独自の解釈が三点説かれている。

一つ目は、『般若心経』は、大乘仏教の教理を文字によって説いたものではなく、大般若菩薩の悟りの内容を真言の形で説いたものである。」としている点である。つまり、『般若心経』は、法身の大日如来が、釈尊の姿で説いたとしているのである。

二つ目は、『般若心経』は、大乘仏教の空の思想を説くだけの教典ではなく、仏教のすべての教えを含んだ教典である。」としている点である。『般若心経』を「人法総通分」、「分別諸乗分」、「行人得益分」、「総帰持明分」及び「秘密真言分」に五分割し、それを説明している。

「人法総通分」は更に因、行、証、入及び時の五つに分けられ、『般若心経』を説く人と、その教えが仏教のあらゆる分野に及ぶことを明示している。

また、「分別諸乗分」は更に五つに分けられ、普賢菩薩の悟りを華嚴、文殊菩薩の悟りを三論、弥勒菩薩の悟りを法相、声聞と縁覚の悟りを声聞乗と縁覚乗の二乗、観自在菩薩の悟りを天台とし、それぞれ顕教に当てはめて、「舍利子、色不異空」から「無智亦無得、以無所得故。」の中に顕教が説かれていることを明示している。

更に、「行人得益分」は般若を行ずる人の利益を分析し明示し、「総帰持明分」は顕教の教理と行果がすべて

秘密真言に帰入することを明示し、「秘密真言分」は最後の真言呪の中に顕教の教理と行果が含まれていることを明示している。

そして、三つ目は、「『般若心経』は、般若菩薩の悟りを凝縮した心真言を主体とした経典である。」としている点である。『般若心経』はもともと呪として唱えられていたと考えられ、空海も呪経と捉え、最後の真言呪「羯諦(ぎゃてい) 羯諦(ぎゃてい) 波羅羯諦(はらぎゃてい) 波羅僧羯諦(はらそうぎゃてい) 菩提薩婆訶(ぼじそわか)」をこの経の本体としたのである。

このように、空海は、『般若心経秘鍵』において、『般若心経』は密教の教典であると主張し、単なる註釈書の域を超えた独自の解釈を展開しているのである。

## おわりに

『般若心経秘鍵』の撰述年代を特定する文献はなく、断定することはできない。

晩年の空海は、『秘密曼荼羅十住心論』や『秘蔵宝鑰』にみられるように密教の眼から顕教を観察し、密教の中で体系化する思想と瑜伽の世界を間接的に披瀝する傾向を展開する。この点を考慮すると、『般若心経秘鍵』の撰述年代は、空海的最晩年の頃とされる。

では、何故に、『般若心経』を選んだのであろうか。それは、『般若心経』が、その頃も最も広まっていた経典の一つであったからではなかろうか。

とするならば、もっと早い時期に、密教の眼から観た『般若心経』の解説書が撰述されていても当然と思われるが、最晩年に撰述された。そこには、空海の『般若心経』への特別な想いがあったのではないだろうか。

それは、空海は、『般若心経秘鍵』に、自らが確立した真言密教の集大成と自身の人生の集大成の二つの意味を込めたからではないだろうか。

そして、『般若心経』を唱えるすべての人々が、真言密教の第十住心「秘密莊嚴心」への転昇を願ったからではないだろうか。